

## 第35回JFクラス選手権大会 参戦記

記 J-683 池田 成利

2025年9月14～15日 兵庫県加古郡にあるいなみ野水辺の里公園 跡池に於いてJFクラス選手権大会が開催されました。

今年も7艇の猛者達が集まりました。このクラスはモノハルで全長、マスト高、セールエリアの制約があるのみ（もちろんセールローチ等詳細はあります。）で他のクラスより大幅に制約が少ない数少ない艇種です。多数の艇種は同一規格で性能を均一化し技量を競う事を主としています。JFクラスに於いては造船に思考を凝らし、思い思いの艇がエントリーしています。基本は1,000mmの全長（水線長を最大に取り）に1,630mmのマスト高に0.38㎡を基としながらモノハル以外は 材料、リグ形式、チャンネル数の制約が無く設計の自由度が大きく同一クラスとは思えないほど多様な艇が集まります。

リグに於いてはコンベンションリグ、スイングリグと今主流のクラスにはない混合でのレースが繰り広げられます。コンベンションリグは対応風域が広くオールマイティーに展開出来、スイングリグは対応風速が狭い代わりにジブセールとメインセールのスロットルの変化がスローズホールドからフリーまで無く、フリーでジブを開いた際 スロットルが開いてしまうコンベンションリグに対してフリーでのパワー（加速）に優れている構造になっています。故にその特性を最大限に活かした展開が予測されます。

そんな中 私の艇は25年以上の古式ゆかしいザ・ヨットと言えるFRPのハルにコンベンションリグを備えた参加艇中最重量艇で最軽量の超軽量カーボンハルの36／600ベースのハルにスイングリグを装備した艇とは1,300g以上重量差があり最目に見ても有利とは言い難い装備と言ってもあながち間違いではないと考えるのが妥当と思われます。強いて言うなれば私の艇にはジブトリムを3チャンネル目に装備をしておりこれを駆使して勝負するしか策は無い様です。

第一レース、朝一番は風は弱く安定しない中、いきなり置いてけぼりを食らいタイムアウト艇に次ぐ6位となりまして。事実上の最下位となってしまいました。先行きが思いやられます。このレースの上位はやはりのスイングリグ艇が占めました。やはり微風時は超軽量36／600ベースのスイングリグには敵いません。軽さが一番の強みになります。ここで抜き出したのは純JF艇で唯一スイングリグを装備した池島艇がトップとなり次いで36／600ベースの橋本艇が続きました。

第二レース。少し風が上がって来ました。やっとな艇がヒールする程度ですがフリーでの弱点を上りでカバーするべくパフを拾いつつ上マークへ急ぎます。ヒッチマークを回航し下マークへ向かうとやはりの軽量スイング艇が一気に迫って来ます。これは精神衛生上あまり良くありません。下ゲートへたどり着く頃には完全に追いつかれ上りのマー

ジンが全くなくなっています。しかも彼らのレイラインは文字通り最短距離で私の内側をしっかりと狙ってきます。これに対抗するには距離は延びてしまいますがブロードリーチで艇速アップを狙います。通常スループリグでは風下側にセールを展開しますがこれでは自艇のメインセールのブランケットをジブセールが受けてしまい効果半減してしまいます。これを改善すべくジブセールを観音開きで展開し風に合わせより前へとトリムしバイザリーでの帆走を試みます。これでセールの受風エリアを確保し何とか逃げ切りやっとなでトップフィニッシュ！ 2位には私と同様純JFの嵐田艇が続きました。

第三レース。技術が拮抗した選手揃いでスタートを決めても上位について行くのがやっとな状況で誰が勝ってもおかしくはないレースが展開されている。トップに軽量の宗助艇、2位に1レースでトップの池島艇、私は上位についていくのがやっとなりました。中々の消耗戦です。もう少し風速が上がれば最重量を活かし上位を狙いやすくなりますが3m/sに届いたり届かなかったりで弱風が続きます。

第四レース。風速の上下に奔走されながら無風スポットにハマった宗助艇が苦戦を強いられそのスキを突いて池尻艇がトップ。重さを活かし2位に私が入れました。3位に池島艇が入りました。今回のレースは純JF艇でスイングリグを装備した池島艇に分がある様に感じます。

第五レース。 トップフィニッシュ出来ましたがスコアは全艇拮抗しており厳しい状況に変わりがありません。少し風が上がれば純JF艇が前に出て、少し落ちれば36/600ベース艇が抜きんでる展開が続きます。1日目が終わったところで点差が5点しもなく1レース崩れただけで逆転されてしまう接戦となっています。

2日目。朝から微風狙いの戦略なのか宗助艇が2連続トップとトータル首位に躍り出てきました。

第十レース。私が3位に入るのがやっとな中、頑張り過ぎたか連続トップの宗助艇がリタイヤで失速しました。

全十一レースが行われ2位とは2点差とほぼ互角で実にエキサイティングなレースとなりました。各艇の特性が遺憾なく発揮され出艇する事はもちろんですが観ているだけでも大いに楽しめるレースが続きました。11レース中トップはたった2回と少なく上位で安定した走りに注力する事がとても重要と再確認出来ました。各艇離れることなく近接戦が多く周りに気付かれる事なく戦術を投入する事が出来ず攻めればやり返されるケースが続きました。

2日間レース運営に尽力頂きましたフリートの皆さまに感謝致します。

近年 このクラスへのエントリーが西日本エリアに限定され寂しい限りです。造船の楽しみを味わい帆走の技量を競え モデルヨットを十二分に堪能できるクラスです。純JF艇はもちろん IOMベース、36/600ベースとハル種も現存し まだまだ開発の余地が大きい艇種となっておりこれからも期待が膨らむクラスになっています。